

僕の心と体をつくってくれたもの

大橋おおはし 啓けい

毎月送られてくる宅配便の箱をいつものように開けると、木のおいがある。宅配便で送られた本にまじり、不思議といつも木のおいがある。この宅配便は本好きの祖母が送ってくれる本の宅配便だ。送ってくれた本はたくさんあるが、タイトルが面白そうでなくても読んでみると、とても面白い本が多い。

僕にはもう一人の祖母がいる。その祖母は毎月のように新鮮な野菜と果物を冷蔵庫に入りきらないほど届けてくれる。僕が冷蔵庫に入れる前に食べてしまうほど季節の果物はおいしい。

荷物が届いたら二人の祖母にすぐに電話をかける。

「おいしかったよ。ありがとう。」

「面白かったよ。ありがとう。」

言葉では簡単に感謝の気持ち伝えることができるが、そんなに簡単に伝えられることではないと思う。

果物を送ってくれる祖母は足が不自由だ。だから大量の重い果物を箱に入れ、押しは手すりを持って進み、押しは手すりを持って進むことをくり返しているにちがいない。そし

て玄関まで持って行き、果物とたくさんのお紙を入れ、郵便局の人に預ける。その箱は翌日僕の元へ届けられる。僕たちはただゲームテープを取り、箱を開けるだけだ。しかし祖母にとってはこれは一苦労だ。なのに祖母はこれを一言も口に出さず、いつも電話越しにすごく嬉しそうに話している。

本を送ってくれる祖母は昔図書館の司書だった。だから毎月毎月、僕の心にとでも残るいい本を送ってくれる。多くは安い年金から僕のために高いお金を使ってくれている。だから祖母が送ってくれた本は自分が買う本よりも生きるための知恵を僕に授けてくれる。

僕の今の心と体をつくってくれたのはこの祖母二人だ。僕と祖母達が住んでいる所との距離はとても遠い。だから宅配便や電話を使ってでしか互いの声を聞いたりお礼を言うことはできない。しかし祖母達と僕との心の距離はとても近い。なぜなら祖母達の思いは果物や本、そして手紙といっしょに届けられているからだ。そのつながりが僕に心と体、そして生きるための力を与えてくれている。